

岡崎市議会議長 様

支出番号	3
------	---

会派名

代表者名

三浦 康宏



下記のとおり、政務活動を実施したので報告します。

## 政務活動旅行報告書

平成29年 7月 31日提出

活動年月日	平成 29年 7月11日 (火) ~ 平成 29年 7月13日 (木)	
氏名	三浦 康宏	
用務先 及び 内容	1	用務先 福井県あわら市
	7月11日	内容 芦原温泉駅周辺整備計画について
	2	用務先 石川県輪島市
	7月12日	内容 回遊性と賑わいのあるまちづくりについて
	3	用務先 石川県七尾市
	7月13日	内容 都市再生整備計画事業について
備考		



# 政務活動視察報告書

報告者：三浦 康宏

視察日	平成29年7月11日(火)
視察内容	芦原温泉駅周辺整備計画について
視察者	山崎憲伸、加藤義幸、内田実、小木曾智洋、鈴木静男、杉浦久直、野々山雄一郎、三浦康宏

## <あわら市の概要>

あわら市は平成4年3月に坂井郡芦原町と金津町が合併し誕生した。県の最北端に位置し、基幹産業は農業と工業、そしてあわら温泉を核とする観光業。北陸自動車道金津ICは県の北の玄関口で、周辺工業団地には製造業が集積している。明治16年に発見されたあわら温泉は、関西、中京の奥座敷と呼ばれ、年間100万人以上の観光客が訪れる福井県随一の温泉観光地。15年の北陸新幹線金沢開業と、その後の福井県内延伸による関東、信越方面からの交流人口の増加を見据え、JR芦原温泉駅の周辺整備や、温泉街の再生整備などのまちづくり事業を急ピッチで進めている。また、「若い世代が住み、生み、育てたくなるまち」を重点施策に掲げ、その実現ツールとして「健康」「教育」「環境」「コミュニティ」「経済産業」の各分野に特化した「HEECE 構想事業」を推進。



面積：116.98 km<sup>2</sup> 人口：28,756人

## <あわら市 芦原温泉駅周辺整備計画の経緯と概要>

平成34年度末の北陸新幹線金沢・敦賀間開業に向けて、現在、あわら市や福井県を始めとする周辺自治体が一丸となって様々な取り組みを進めている。

あわら市に於いては、観光地としての知名度と魅力の向上はもとより、その効果を最大限に活かした地域経済好循環を実現する仕組みづくりや、市民に愛され、市内外の人々が訪れたいような芦原温泉駅周辺の整備が急務となっていた。

そして平成18年3月に策定した「芦原温泉駅周辺整備基本計画」に基づき、各種事業を進めて来たが、新幹線計画の具体化、時間の経過に伴う交通条件等の変化、地域ブランド創出事業などあわら市における新たな取り組みなどを背景に、①芦原温泉駅周辺の基本構想の見直し、②交通施設計画（駅舎、自由通路、アクセス道路、駅前広場等）の見直し、③新たなエリア設定、都市景観形成に係る計画の見直しの3つをポイントに挙げ、計画の改定を行った。



## <あわら市 芦原温泉駅周辺整備計画の特色>

中心事業として「芦原温泉駅周辺賑わい創出事業」が挙げられる。これは最初に芦原温泉駅周辺のまちづくりの方向性を示すため、地域ブランドのコンセプト「都会にはない贅沢があるまち」を基に、将来デザインを描くことを決定し、市内全世帯、全小・中・高校生、企業、



市外者等を対象とする「あわらの未来づくりアンケート」(A4裏表印刷全戸配布)や「市民ワークショップ」のほか、地域ブランド戦略会議直属の専門部会「芦原温泉駅まちづくりデザイン部会」による検討を重ね、全国的に著名な3組のデザイナーに市民の声を広く反映するものとして描いてもらい、エリアごとに十数点を作成した。そして平成28年11月27日、デザイナー3組による公開プレゼンテーションを実施し、市民投票(中央公民館ホールにて約400名が参加)により最終5点(鳥瞰図含めて6点)の将来デザインを採

用し、以後採用された将来デザインに込められた理念を踏まえ、芦原温泉駅周辺のまちづくりを進めて行く。

上記将来デザインの具現化に向け、「賑わいと交流ゾーン(芦原温泉駅周辺整備基本計画書)」における賑わい創出の為の機能や仕組みを年度ごとに概算費用を含めて定める

「芦原温泉駅周辺まちづくりプラン」を策定する。尚、プランの策定に当たっては芦原温泉駅周辺地区の現況の課題整理を行うと共に、市民や観光客の顧客動向やニーズ等を把握することにより、エリアごとに活性化に資するために、どのような地区機能が求められているかを調査し、その分析結果を反映する。また芦原温泉駅まちづくりデザイン部会を中心として、ワークショップを開催するなど、北陸新幹線開業に向けた市民の機運の高揚を図る。

事業体制としては、最高意思決定機関として、市長を会長に産官学金労の関係者を委員とした「あわら地域ブランド戦略会議」があり、事務局を市の新幹線街づくり課がつとめ、学識経験者や地元の協議会、市商工会、市観光協会、女将の会などが委員を担う「芦原温泉駅周辺賑わい創出協議会」がまちづくりプランの策定機関としてプランの提言を行う。



#### [感想・岡崎市への反映]

平成27年の観光客が20年ぶりに200万人(内宿泊客約94万人)を超えた人口29,000人のあわら市は、平成35年春の北陸新幹線開業を控え、土木部内に「新幹線まちづくり課」を設ける等、その効果を最大限に活かしたまちづくりを官民一体となって推し進めようと様々な事業に着手している。「みんなでつくる 都会にはない贅沢があるまち」をテーマにブランド専門部会が作った「ああ、あわら贅沢。」をブランドスローガンに掲げ、市民が市のブランドイメージを共有し一体的に発信することで、市の魅力度と認知度を高める地域ブランドの確立を目指している。「芦原温泉駅周辺整備計画」も市民を巻き込み、市民の声を反映させ、共に事業の進展を図ろうとする姿勢が随所に見られ、本市のまちづくり事業にも欠かせない、重要な要素だと改めて感じた。

# 政務活動視察報告書

報告者：三浦 康宏

視察日	平成29年7月12日(水)
視察内容	回遊性と賑わいのあるまちづくりについて
視察者	山崎憲伸、加藤義幸、内田実、小木曾智洋、鈴木静男、杉浦久直、野々山雄一郎、三浦康宏

## <輪島市の概要>

輪島市は日本列島の中央部、日本海へ突出する能登半島の北西端に位置する。江戸時代に北前船の寄港地として栄えた。伝統産業「輪島塗」や朝市、輪島温泉、總持寺祖院等に象徴される観光都市。06年2月に門前町と合併し、新「輪島市」に。豊かな緑と海に囲まれた人口約3万人の町で、中世に曹洞宗の本山「總持寺」が開かれ、北前船の世紀には「親の湊」と呼ばれ、海上交通の要衝として栄えるとともに、江戸中期以降は漆器業（輪島塗）が盛んに。現在、「漆の里」「禅の里」「平家の里」の3つの里構想を前面に、町の魅力を発信中。15年2月には「能登自動車道」が七尾ICまで開通、3月には「北陸新幹線」が開業となり、能登までの交通アクセスが格段に向上。相乗効果による交流人口拡大や地域活性化に期待。



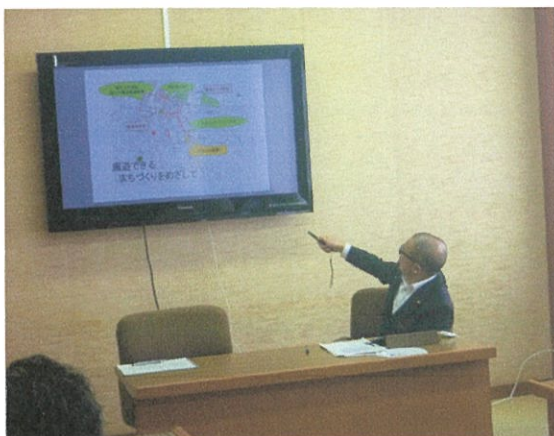
面積：426.32 k m<sup>2</sup> 人口：27,205 人

## <輪島市 回遊性と賑わいのあるまちづくりの経緯と概要>

輪島市は平成13年に65年間利用されていた鉄道七尾線が廃線となり、当時は絶望と共に大きな騒ぎに包まれた。その後輪島駅は、まちづくり総合支援事業の一環として、「道の駅輪島」として生まれ変わり、人の心も街のつくりもバリアフリーのフラットな街でありたい、鉄道駅であった名残をあらわすプラットホーム、ふらりと訪れ小さな夢を見つけて頂く意味を込め、「ふらっと訪夢」の愛称で親しまれている。

またバブルの崩壊から鉄道廃線が行政、市民に強烈な危機感を煽り、更に平成19年の能登半島地震を経て、輪島市に新たなまちづくりの機運が熟成され、行政と市民が一体となり、洋風でも和風でもない「輪風」なまちづくりが推進されることとなる。

周遊できるまちづくりを目指して、平安時代よりお宮の境内の物々交換に始まり、



1,200年の歴史を持つ「輪島朝市」のある本町・朝市通りのまちづくり総合支援事業、そこから「ふらっと訪夢」までを結ぶ「都市ルネッサンス事業」、マリンタウンプロジェクト、鳳至上町地区街なみ環境整備事業を一体的に進めている。

## <輪島市 回遊性と賑わいのあるまちづくりの特色>

〔都市ルネッサンス事業〕:ふらっと訪夢から本町・朝市通りに続く約500mの商店街通りを石川県が事業主体となり行った整備事業。

平成8年より、まず県が3軒のモデルハウスを作り見本を示し、その後商店街が積極的に競い合う形でそれに倣い、セットバックや歩行者空間の確保等を進めた。その過程で商店街が中心となり「まちづくり部会」が組織され、「輪島まちづくり協定」を定め、2つの遵守項目(こころの調和:みんなしてもうちよっこり いいまちにせんけーね、1mのセットバック)とまちなみの「調和」等8つの尊重項目、5つの参考項目を記した。



〔本町・朝市通り整備〕: 工事着手前は絆創膏を貼ったような通りの路面であったが、工夫を凝らした自然石舗装で石畳に変身、電線類の地中化により、開放感が生まれた。

〔鳳至上町地区街なみ環境整備事業〕: 平成14年からスタート。改修する時に上限200万円で2/3の補助を出し、屋根は切妻屋根とし、黒系統の日本瓦とする、商売が分かる表札・看板を設ける、外壁は白壁漆喰・木製板仕上げとする、出入口の建具は木星とする、伝統様式である「浜屋づくり」を用いる等、目指す

景観に配慮した整備を行うもので、能登半島地震の被害もあり、現在98%達成している。

〔マリンタウンプロジェクト〕: 本町・朝市通りの東側18.7haの埋立地を社会資本整備事業として平成5年から平成23年にかけて開発(県が5.2ha、市が13.5ha)。総事業費90億円。公園や全天候型400mトラック、人工芝サッカー場、輪島キリコ館、また輪島朝市などへの周遊を促すべく、乗用車600台の大駐車場を整備。駐車場は昼まで利用料300円(市民は100円)、昼食を現地で取れば無料とし、12時過ぎは翌朝8時半まで無料。

因みに輪島キリコ館前では市が年間400万円程の補助を出し、石川県指定無形文化財、輪島市指定無形文化財である「御陣乗太鼓」をゴールデンウィークから11月に掛けて(7、8、9月はほぼ毎日)夜8時30分より無料実演している。



#### 〔感想・岡崎市への反映〕

担当して頂いた土木課長さんのお話の中で、特に印象的だった点が2つ。1つは輪島市がバブル崩壊、鉄道廃線、能登半島地震の3つを経験し、朝市の観光客が250万人から100万人に激減するなど、危機感を行政、市民が共通に実感し、自分事と捉え一体となってその改善に取り組めたこと。2つ目は、現市長がアイデアマンであり、平成10年の就任以来、市民をあげた客船の見送りや、半分は耕作放棄地のそれまでお荷物だった千枚田をオーナー制度や2万個のソーラーLEDでの電飾等で朝市に次ぐ全国的な観光スポットにする等、先頭に立って様々な改革、新しい試みに挑戦していることであった。65年の歴史に終止符を打った鉄道の廃線も、電車の駅は3つしか無かったが、バス停は21か所もあると言った逆転の発想で捉え、千枚田のように「お荷物が宝に変わった」と言える結果を導き出している。リーダーが率先垂範し、行政、市民の意識が一体となった時に大きな成果は現れるお手本だと感じた。

電車も走っていない人口2万7千人の街に、平成18年ホテルルートインが開業し、まもなく2つ目のホテルが建設されるそうである。またコンセプトで統一されたまちは古い街並みを感じながらも非常にモダンな印象を受けた。輪島市を訪ね、施策の成果を大いに肌で感じられた。本市も来訪者にこのような感覚を抱いて頂けたらと願う。

# 政務活動視察報告書

報告者：三浦 康宏

視 察 日	平成29年7月13日（木）
視 察 内 容	都市再生整備計画事業について
視 察 者	山崎憲伸、加藤義幸、内田実、小木曾智洋、鈴木静男、杉浦久直、野々山雄一郎、三浦康宏

## <七尾市の概要>

七尾市は県北部、能登半島の中央部東側に位置する能登地域の中心都市。04年10月に七尾市と鹿島郡田鶴浜町・中島町・能登島町が合併し、新「七尾市」が誕生。市の中央には七尾西湾と七尾南湾、その北東に能登島がある。室町期は畠山氏、江戸期は前田氏の城下町。能登観光拠点の和倉温泉がある。将来都市像を実現する為に、限られた資源を有効に活用し、重点的かつ戦略的に各施策に取り組む。基本計画では「ひとづくり」「経済活性化」「安全・安心」をキーワードに各施策を展開。協働のまちづくりの為の理念・ルール・仕組みや、市民・市役所・事業所の役割などを定めた「まちづくり基本条例」を12年に施行。能越自動車道・七尾氷見道路が15年2月全線開通、3月に北陸新幹線金沢開業。インバウンドを含む交流人口の拡大、石川の食文化と世界遺産を活用した第6次産業化等を推進中。



面積：318.32 k m<sup>2</sup> 人口：55,348 人

## <七尾市 都市再生整備計画事業の経緯と概要>

七尾市は能登半島観光の宿泊拠点である和倉温泉があり、多くの観光客が来訪する。しかし中心市街地では「小丸山城址公園」「山の寺寺院群」「七尾美術館」などの観光資源があるものの、点在していることから滞在時間が短く、また地域商店街での消費額が少なく、商店街は年々衰退して来た。そうした中、平成16年より一本杉通り商店街が、幕末から明治にかけて加賀藩領内では花嫁が嫁ぎ先に「のれん」を持っていく風習を利用し、これらののれんを通りに掲げる「花嫁のれん展」を毎年4月下旬から5月上旬にかけて開催している。平成23年10月には、通念的に観光客を受け入れたいと、振興会が中心となって、空き家を活用した花嫁のれん常設展示場を開設し、年々観光客や大型バスでの団体客が増えてきた。しかし展示規模が小さく、受け入れ態勢が乏しいことから、地域住民より、婚礼時の場面を再現している花嫁のれんの展示、観光資源の情報発信、休憩施設などの機能を併せ持つ中心市街地観光交流センター建設の声があがった。これを受け、地元商店街が中心となり、平成27年春の北陸新幹線金沢開業、能越自動車道七尾ICまでの開通などによる交流人口の拡大が整いつつある中、官民一体となってこの施設を核としたまちづくりが必要であると動き出した。



大目標として「歴史・文化資産を活用したまちなかのにぎわいづくり」を掲げ、①歩く楽しさが体感できる「みち」の演出に

よる交流人口の拡大、②「アートとのれん」が彩る商店街のにぎわいづくりによる集客力の向上、③まちなか地域資源の魅力再発見による住民意識の向上の3つの目標を定めた。

平成25年から29年度の5か年を事業期間とし、総事業費10億円(内国費40%)、基幹事業として道路2路線、小丸山城址公園、地域生活基盤施設案内看板、高質空間形成施設市道高質舗装6路線、高次都市施設観光交流センター1棟の整備を行う。



#### <七尾市 都市再生整備計画事業の特色>

七尾市中心市街地観光交流センター：事業費5億円を掛けて、旧中央図書館、徳沢荘などの跡地に平成28年4月にオープン。展示・体験・物販・観光情報スペースである「花嫁のれん館」と交流広場、茶会・句会の和室からなる「寄合い処みそぎ」の2棟を年間800万円の委託料で、一本杉通り商店街の方々が中心となる一般社団法人七尾家が指定管理し、年間約24,000人が訪れた。

JR七尾駅の駅前再開発と、観光拠点として整備された年間80万人が訪れる「能登食祭市場」、それと隣接する市民の憩いの空間、イベント空間として整備された「七尾マリパーク」を2核1軸とする700mに亘る都市軸整備と、一本杉通り商店街を通り、小丸山城や花嫁のれん館などがある歴史・文化ゾーンと、七尾美術館のある歴史・美術ゾーン、16カ所のお寺が連なる歴史・自然ゾーンを結び、回遊性を高める施策が進められる。



#### [感想・岡崎市への反映]

七尾市は平成26年に、平成20~24年に事業実施された和倉温泉地区に於いて、都市再生整備計画に基づくまちづくりで、優良な計画が策定され、事業の実施、評価、改善において優れた取り組みを行った地区などを対象として表彰される、第9回まち交大賞「まちづくり達成大賞」を受賞している。これに続き、地元商店街に端を発し、テレビドラマにまで取り上げられた「花嫁のれん」を核としたまちづくりを都市再生整備計画事業として実施している。いずれも市民、行政が一体となり推進、展開をしている所に感銘を受けた。人口5万5千人の市で和倉温泉に年90万人、能登食祭市場に80万人が訪れ、市全体としての観光客は年間380万人とのことである。家康公の出生地であり、岡崎城、大樹寺、滝山寺に、春の桜、夏の大花火等の観光資源が豊富にあり、観光を新たな基軸として施策を展開する人口38万人の本市の観光入込客数の目標が583万人となっている現状にはやはり不満を感じずにはいられず、様々な挺入れを促したい。